

新潟県内の山村・漁村の助産介助の歴史的比較検討 ： 上越地方の大正・昭和初期生まれの開業助産婦の 聞き取り調査

著者	加城 貴美子, 高橋 初美, 小林 美代子, 和田 佳子, 笹野 京子, 阿部 正子, 高塚 麻由, 西方 真弓, 橋本 明浩
雑誌名	学長特別研究費研究報告書
巻	14
ページ	19-20
発行年	2003-06
その他のタイトル	Comparative Study of the History of Midwife Assistance in the Mountain and Fishing Vilages of Niigata Prefecture : A survey of Midwives in Private Practice in the Joetsu Area Who Were Boren during the Taisho and Early Showa Eras
URL	http://hdl.handle.net/10631/476

新潟県立看護大学学長特別研究費 平成 14 年度 研究報告

新潟県内の山村・漁村の助産介助の歴史的比較検討
— 上越地方の大正・昭和初期生まれの開業助産婦の聞き取り調査 —

研究者（研究代表者） 加城貴美子¹⁾
共同研究者 高橋初美²⁾, 小林美代子²⁾, 和田佳子¹⁾, 笹野京子¹⁾, 阿部正子¹⁾,
高塚麻由¹⁾, 西方真弓¹⁾, 橋本明浩³⁾

新潟県立看護大学(母性看護学)¹⁾(看護基盤科学)³⁾, 新潟県立看護短期大学(助産学)²⁾

A Comparative Study of the History of Midwife Assistance in the Mountain and
Fishing Vilages of Niigata Prefecture
: A survey of Midwives in Private Practice in the Joetsu Area Who Were Boren
during the Taisho and Early Showa Eras

Kimiko Kashiro¹⁾, Hatumi Takahashi²⁾, Miyoko Kobayashi²⁾, Keiko Wada¹⁾,
Kyouko Sasano¹⁾, Masako Abe¹⁾, Mayu Takatsuka¹⁾, Mayumi Nishikata¹⁾,
Akihiro Hashimoto¹⁾

1)Niigata College of Nursing, 2)Niigata College of Nursing,

キーワード：助産師 (midwife), 歴史 (history), 面接 (interviews)

目的

新潟県内の助産婦の母子保健活動の歴史を助産師学生の学習に還元するために、大正・昭和初期に生まれた開業助産婦の戦後実施されてきた妊産褥婦への援助、保健指導、分娩介助、助産婦の地域社会での役割・貢献内容を新潟県内の物理的特長から明らかにする。

本年度は、戦後の上越地方で実施されてきた助産婦活動について聞き取り調査を行ったのでここに報告する。

研究方法

1. 対象：上越地方在住で大正・昭和初期生まれの助産師 6 名。
2. 期間：2003 年 2 月 26 日～3 月 27 日
3. 内容：助産婦になった動機、開業時の概要、業務内容、指導内容、産育習俗など。
4. 方法：半構成的質問紙による聞き取り調査。面接時にビデオ撮影、録音を行い、逐語録を作成した。分娩介助に使用していた機器類を写真撮影して記録保存とした。
5. 分析：面接内容から起こした逐語録およびフィールドノートより、助産婦の Philosophy、助産の技術、助産婦の私史、産育習俗との関わりについて項目ごとにまとめた。
6. 倫理的配慮：調査にあたっては、事前に本調査の趣旨を口頭と文書にて説明し、研究に同意を得た。説明時には、面接時の録音とビデオ撮影の同意も同時に得た。

結果・考察

1. 対象の概要：対象の年齢は、78 歳～84 歳（平均 80.7 歳）の 6 名であった。産婆教育を受けた時期は、昭和 6 年～昭和 22 年であった。開業時期は、昭和 12 年～昭和 29 年であり、開業時の年齢は、21 歳～29 歳（平均 25.0 歳）であった。開業以降の助産職の通算年数は、50～64 年（平均 56.6 年間）であった。現役の助産師は、4 名であった（Table 1）。
2. 産婦との連絡方法・交通手段：分娩時、家人から産気づいた様子だと迎えがあり、家人とともに、徒歩や自転車で産婦のもとへ出かけていた。降雪時には、スキー、藁沓、カンジキなどに、提灯や懐中電灯を持ちながら、1 里～2 里、の道程を 2～3 時間歩いて産婦の下へ出かけていた。通信や交通手段がほとんどなく、新潟県上越地方の大雪の中でも、地域に根ざし活躍している助産婦の姿が伺えた。終戦後まもなく、優先的に自宅に電話を入れ、分娩時の連絡も電話となった。その頃から、バイクを使用する助産婦もいた。助産婦は、通信手段の必要性から、地域でも優先的に電話の導入が図られていた。
3. 習俗との関わり：妊娠期は、胎動を感じるようになった妊娠 5 ヶ月の戌の日に着帯を行った。腹帯は、「安産になる」という縁起をかつぎ 7 尺 5 寸 3 分の長さであった。分娩時、穢れるからと、自宅の居室の畳を取り払い、藁を敷き分娩をさせようとした家や、出産後は、出血や産後トイレが近いので、藁の上ならば垂れ流しにできるため藁を敷いただけ、あるいは牛を飼っていた場所に藁を敷いて産室にする家もあった。胎盤は、各家で堆肥や庭に埋めるなどの始末していた。埋める方向は、各家の鬼門の方向であった。また、よなとり（胎衣）のお婆さんという、胎盤を集める人がいて、分娩があった家を回り、胎盤を集めることを生業としていた人もいた。胎盤や産湯の扱いは、地域の習俗に従いながらも、助産婦は、出産に伴う衛生環境を変化させていく関わりを行っていたと言える。地域に無資格の取り上げ婆さんがいる地域もあった。産褥期は、帯あけまでは、不浄だから自宅の産室からでないようにし、家族とは一緒に食事もできなかった。部屋を出る時には、草

Table 1 属性

	年齢	助産婦暦	産婆学校	活動地域	訪問時の交通手段	他の資格
A	83歳	58年	昭和18年	上越	自転車・バイク 大雪の時薬	看護婦・保健婦 受胎調節実施指導員 児童保護司
B	78歳	53年	昭和21年	直江津	自転車・バイク スキー・かんじき	看護婦・保健婦 受胎調節実施指導員 児童保護司
C	84歳	53年	昭和6年	直江津	徒歩・家人の迎え	
D	78歳	57年	昭和14年	新井	自転車・バイク	看護婦
E	78歳	50年	昭和22年	新井	自転車・バイク	保健婦
F	83歳	58年		新井	自転車・徒歩 家人の迎え	

鞋を履いて出るようにしていた。助産婦は、出産に伴う祝い、帯あけ、出産祝い、お七夜（出産後7日目）、命名式、誕生祝（1歳の誕生日）等と呼ばれることもあった。オムツは、神様・仏様・太陽に『ばち』が当たらないように干す習慣があった。

4. 地域との連携：産婦人科医と日頃から連携をとり、異常時には、約束・指示で使用する薬剤を決めておき、緊急時は連絡し、産婦の自宅へ来てもらうこともあった。医師からの信頼を得られるよう、講習会や勉強会、助産婦の連絡会など、母子の命を守る体制作りで普段から心がけていた。その土地（活動地域）で生まれて仕事をするため、家庭の中の様子がわかり、地域の人からは何でも相談され、可愛がられた。助産婦というより、保健婦として関わることも多く、兼務していた時期もあった。助産婦は、地域の中で妊産褥婦に関わる助産業務としての関わりに加え、保健指導の専門職としての役割を担い、地域社会に貢献していたと言える。

5. 戦後間もない時代の関わり：低所得の人からは、分娩費が貰えなく、自分の子どもの古着をやるということもあった。また、嫁で小遣いを貰ってないため妊婦検診を受けられない妊婦もおり、利益抜きで、そのような、経済的に苦しい妊婦達の支えにもなっていた。分娩時に使用する褥布団などは、藁を燃やした灰や、ボロキレ、新聞などの身近にあるものを最大限利用し、衛生材料を補うよう援助・指導を行っていた。

6. 妊産婦への援助と周囲への働きかけ：自宅での作業や家事などの労働を出産間際まで行い、栄養も休息も十分に取れず、家族や姑に気を使っていた嫁に対し、助産婦は常に妊産婦の見方として家族にも保健指導を行ってきた。1回の妊婦健診に30分～2時間を要し、妊娠・分娩・育児の指導のほかに、妊産婦の相談なども受けた。時には、姑とのコミュニケーションのとり方を話し、姑に嫁の代弁をし、妊産婦の話を聞き、思いやりの心をもって接し精神的な支えとなっていた。妊娠中毒症や貧血の対策のための食事指導を行った。農村の嫁は、魚の尻尾や頭しか与えられず、お粥と梅干の低蛋白の食事がほとんどのため、栄養状態が悪く、家族、特に姑への食事指導を働きかけた。分娩指導として、赤ちゃんの『出よう』という力により、産婦の『産もう』という力が一緒になったら、『良いお産』ができると説明し、「お産は痛くならなくては産まれない」、「それを耐えるから育児もできる」と励ました。助産婦は、産婦と児が本来持っている『産む力・生まれる力』を引き出すような、関わり方をしていたと言える。

結論

平成14年度の助産師の聞き取り調査について、聞き取りができた内容についてまとめた。大正・昭和生まれの上越地方の助産婦の活動、妊産褥婦の生活と受診状況が明らかになった。現在聞き取り調査の途中で、当初の目的である比較検討するまでの聞き取り調査を終了していない。今後は聞き取り調査していない内容とさらに聞き取る助産師を多くして助産学の教育に組み込むことが出来るようにしていく予定である。

文献

- 1) 西村正子. 産育習俗史 (第I報) 広領域からみた妊娠・分娩・産褥期における日常生活行動. 母性衛生 2002; 43(2): 243-54.
- 2) 西村正子. 産育習俗史 (第II報) 広領域からみた食生活行動と乳汁分泌促進法. 母性衛生 2002; 43(2): 255-68.
- 3) 吉留厚子, 林猪都子. 先輩助産婦に聞く家庭分娩. 助産婦 2000; 54(1): 38-40.
- 4) きくちさかえ, 及川サトミさん 92歳, 日本の出産の目撃者. 助産婦雑誌 2001; 55(6): 526-31.
- 5) 蒲原宏. 新潟県助産婦看護婦保健婦史. 新潟県助産婦看護婦保健婦史刊行; 1967.